

「FUT数理・データサイエンス・AI教育プログラム」(令和7年度)自己点検・評価体制における意見等(様式5)

[教学IR委員会 令和8年 2月 24日承認]

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
プログラムの履修・修得状況	令和7年度の1年次学生の履修率は68.2%(348名/510名)であり、令和6年度の60.6%から約8ポイント増加した。4月のガイダンス等における本プログラムの意義の説明などが履修率の向上に繋がっていると考えられる。また、グループ間で差があるものの、全体における不可と無を合わせた不合格率(22.8%)は令和6年度に比べて9ポイント程減少しており、授業の内容や難易度の見直しなどが功を奏したのではないかとと思われる。
学修成果	グループ間での成績評価の差は、令和6年度に比べるとかなり改善されている。しかしながら、一部のグループにおいて「無」の評価が多かった点については、令和6年度からほとんど改善が見られないため、引き続き検討が必要である。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	「面白い授業であった」「世の中の進歩について学ぶことができた」「自分の学科以外の教員の授業を受けることができた」など、好意的な感想がある一方で、授業の方法に関する意見や指摘がいくつか見受けられる。これらの声に真摯に耳を傾け、教員側で対応できるものについては工夫や改善をすることによって、さらなる満足度の向上につながるとと思われる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	授業を受けても受講者の2割以上が単位を修得できないといった状況は、履修率の低下につながる恐れがあり、この科目(プログラム)の存在意義そのものが危ぶまれることにもなりかねない。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	履修者数や履修率を向上させるには、受講生の意見を取り入れて満足度の高い授業を実践していく必要がある。それには「授業改善のためのアンケート」が重要な役割を果たすと言える。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	いずれのグループにおいても、授業内容にSociety5.0やAIが含まれるなど、昨年度に比べてプログラムとしての統一感が増しており、改善の痕が窺える。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	全体の成績評価分布を見ると、「無」の評価が30%を超えているグループがある。主因は受講生の欠席にあるとしても、その状況をもたらしている理由を引き続き調査して改善する必要がある。また、1年次学生のみで見た場合に「無」の評価は12.6%であり、令和6年度の12.7%からほとんど変わっていないため、この点についても注視していく必要がある。